名古屋大学
日本語・日本文化研究生 第41期

バイリンガル・バイカルチュラルと多言語・多文化の受容態度および適応度の差

― 韓国人大学生に対するアンケート調査を通して ―

キムダミン（大韓民国）

１．はじめに

国際社会、グローバル化ということばが当たり前のように聞かれる現代では、多くの人々が様々な言語や文化に接する機会が多くなっている。筆者も幼い頃、両親の仕事の関係で日本という外国に滞在することになったため、自身の意志とは別に、日本語や日本文化に接するようになり、バイリンガル、バイカルチュラルという概念に含まれる人間となった。しかし、バイリンガル、バイカルチュラルという概念について、聞いたことはあるが正確にどのようなものなのかは確信がない状態であった。大学の生徒や知人に質問してみたが、単語の意味自体や、二つの概念の差を知らない人が非常に多かった。2つ以上の言語を身に着けているとはいえ、両国の文化まで完全に理解しているとは言えない。また、二つの文化に接している人であっても、価値観や所属感が定まらず、本人でさえ自身が何者であるのかを決められない状況に置かれている人も場合もある。人間は社会的な動物であり、1つ以上の社会団体に所属することによって価値観、所属感を決めることができるとされている。筆者も過去に日本に在留した経験があるが、所属感、価値観が完全には成り立たない少年期には、自分自身の所属感や価値観について疑問を抱いていた。本研究では、バイリンガル、バイカルチュラルが自己尊重感に及ぼす影響について調査を実施し、これらの関係性を明らかにする。さらに、これらに接する事によって及ぶ影響、また、2つの概念にどのように接していけばバランス身に着けることができるかについて、筆者の考察を示す。

２．前提知識と先行研究

２．１　定義

本研究で引用する用語の定義は、各用語について研究している先行研究からそれぞれ引用することにした。以下、本研究で言及する「バイリンガル」「バイカルチュラル」「自己尊重観」について、先行研究で述べられている定義を示す。

まず、「バイリンガル」は、「二つの言語を母語話者のようにコントロールすること」、「ある言語の話し手がもう一つの言語で完結し、かつ有意味である発話ができ

る時点をバイリンガルの出発点とする」という意味で定義されている（宮原2010）。

次に、「バイカルチュラル」は、「周辺化、同化、分離、統一という4つの形式で文化に適応する態度」、「二つの文化を調和よく受容しており、心理適応に肯定的影響を与えること」（Berry1997）とされている（イジンギョン・イヘジョン2019）。

最後に、本研究の主要な概念でもある「自己尊重感」については、「肯定的自己概念で、己の能力を価値のあるものと判断すること」（Coopersmith1981）と定義されている。言語的、文化的方面では、「自分の国籍、文化、言語をどれほどほこり高く思うかの程」と定義されている。人生全過程で、個人の変化と適応をする際に影響を与えるものであり、「個人の満足感と人生の進路に影響を与える重要な概念の一つ」とされている（イジンギョン・イヘジョン2019）。

なお、本研究では、「自己尊重感」について、言語的側面での意味で、自分の国籍、文化、言語をどれほど誇り高く思っているかについて考察する。

２．２　自己尊重感に関する先行研究

キムサンオク・ジョンヨンジャ（2013）では、大学生の自己尊重感について、憂鬱、不安を中心に研究を行った。この研究での自己尊重感は、一般的に自己に対して個人を総体的、肯定的に評価することである。広義では、自己概念、自己受容、自己革新、自己強化などと同等の意味で使用されており、狭義では、肯定的な自己概念で表現され、性格発達の基礎となっている。Rosenberg（1965）では、自己尊重感を一つの特別なもの、すなわち自己に対する肯定的、否定的態度で自己尊敬の程度と己を価値のある人と考える程度の意味であると述べている（キムサンオク・ジョンヨンジャ、2013、pp.4-5）。

キムサンオク・ジョンヨンジャ（2013）は、大学生400名を対象に自己尊重感の平均値を調査した。最終的に341名（男性161名、女性180名）の解答を分析した。その結果、自己尊重感は5段階（5が最高値）で3.71という結果、憂鬱度の調査では平均2.21という結果が出たことを示した。大学生の場合、成人した後の学生であるため、学業、就職の両面でのストレスの中で生きていかなければならない。したがって、認知と感情役割がしっかり区別される前に社会に出ることになるため、比較的憂鬱程度が高い学生がいた。憂鬱度の結果と自己尊重感は比例して動くとされていることから、キムサンオク・ジョンヨンジャ（2013）は、結論として、認知と感情をしっかり分裂させた後に社会に出るように、周囲の心掛けが重要であると述べている。

２．３　二重言語・文化要因と自己尊重感に関する先行研究

イジンギョン・イヘジョン（2019）は、多文化環境の影響を受けている青少年を対象に、二重言語要因、二重文化要因が自己尊重感の態度に及ぼす原因、影響について調査を行った。2016年基準で、比較的多文化家庭の学生が多い地区の複数の中学生合計1329名のうち、無応答と欠席を除いた1314名を対象にして、二重言語要因、二重文化要因が自己尊重感に及ぼす影響を研究した。表1に、その結果を示す。

表１　研究対象の人口社会学的特性（n＝1314）：イジンギョン・イヘジョン（2019、p.89）より引用

区分	項目	頻度	%
性別	男子	646	49.2
	女子	668	50.8
学業会得度	とてもできない	65	4.9
	あまりできない	434	33.0
	普通である	645	49.1
	上手である	149	11.3
	とても上手である	21	1.6
外国人両親	父親	42	3.2
	母親	1272	96.8

表１を見ると、男女の性比率は女子49.2%、男子50.8%という結果となっており、調査対象の性比はほぼ同率となっている。学業会得度は、「普通」と回答している学生が49.1％で一番多いが、「あまりできない」と答えている学生も33％存在する。また、「外国人両親」の区分の結果を見ると、母親が外国人である割合が96.8％と高い水準であることが分かる・

イジンギョン・イヘジョン（2019）で行われた調査内容は、青少年の性別、学業会得度、外国人である両親の言語使用力、韓国語使用力、両親のお互いの言語の使用力、使用頻度、そして外国人である親の母国への訪問頻度、経験、自己尊重感の変化などを調査内容として設定した。この調査では、多文化青少年ペナル（MAPS: Multicultural Adolescents Panel Study）のデータを活用した。以下、表2に結果を示す。

表２　変化要因の特性（n＝1314）：イジンギョン・イヘジョン（2019、p.90）より引用

重要原因	細部要因	頻度		
		最低格	最大格	平均
二重言語要因	外国人両親言語　使用能力	1	4	1,96
	外国人両親　韓国語使用能力	1	4	3.24
	両親との両親母国語使用有無	使用する：398（30.5%） 使用しない：907（69.5%）		
	両親間両親母国語使用有無	使用する：179（14.3%） 使用しない：1076（85.7%）		
二重文化要因	二重文化受容態度	1	4	2.92
	文化適応ストレス	1	4	1.42
	外国人両親の母国訪問経験	ある：245（18.6%）ない：1069（81.4%）		
	外国人両親家族韓国訪問経験	ある：258（19.6%）ない：1056（80.4%）		
従属変化	自己尊重感	1	4	3.14

表2で示したように、二重言語要因の外国人両親の言語使用の能力は、1.96という低い結果となった。外国人両親の言語を能力として使うことができない場合は多いが、外国人両親の韓国語使用能力は、平均3.24となっており比較的高い。しかし、両親と子供、両親同士で外国人両親の言語を使うか使わないかは、それぞれ69.5％、85.7％となっており、全体的に見ると滞在国の韓国語を使用することが多いという結果となった。このことから、外国人両親の母国語を家庭内で使用する頻度はとても低く、家庭内でも学生たちの二重言語使用は限界があるということが示された。

二重文化要因については、二重文化受容態度を見ると平均2.92となっており、両親の言語と比較すると、理解しようとする態度を比較的持っていると思われる。また、文化適応ストレスは平均1.42と比較的低く、自己尊重感も高いという結果が出ている。しかし、両親の母国への訪問経験や両親の家族の韓国訪問経験は少なく、約80％以上が訪問したことがないと回答している。これらの結果を、分散膨張指数（VIF）の結果によってさらに詳細に分析した結果、自己尊重感の程度は、学生の一番大きい生活範囲である学校の影響が強く、学業成果度、成長期に気になる性別の差によって異なってくることが明らかとなった。また、両親の母国語の使用有無にかかわらず、在留国である韓国の言語（韓国語）を使用する頻度、使用能力の差によって異なってくるということも明らかとなった。

次に、自己尊重感については、一番大きく影響を与える要因は、家庭内環境の変化、

個人の感情の変化、その他に学校内活動など、青少年の外見の変化、心理的変化などのすべてに影響する。青少年の場合、女子は青少年期に身体の外見が一番はっきりと変化する時期であり、男子に比べて外見を重視する場合が比較的多く、青少年期の特徴として他人と比較する場合が多いため、自身の外見が他人より悪いと判断した場合、自己尊重感が低くなるという結果になった。家庭内でも、青少年に与える影響は多く、家庭内で言語的要因や文化的要因が調和よく身についた場合には問題ないが、 言語的要因、文化的要因に接する際にしっかりした環境が整っていない場合、青少年の自己尊重感と社会適応能力も低下してしまうという結果が出た。言語的要因だけでなく、文化的要因も青少年の自己尊重感と社会適応能力、学校成績などに影響を与えている。本人が主に接していた文化との違いや、他人との差を気にする青少年は多数おり、青少年は、他人との差を最も受けやすい世帯であるため、 文化適応ストレスを受けやすく、これは、自分が滞在している国の文化の人々に受ける視線と差別を気にしており、文化適応ストレスは心理的変化をもたらす大きな原因とされている（Berry1990）。韓国国内の多文化家族の二重言語要因、二重文化要因の研究の場合、青少年を対象として行われている研究が多いが、これは、多文化青少年の発達段階、経験による心理的変化の有働が多いという特徴が影響していると考えられる。

しかし、イジンギョン・イヘジョン（2019）では、青少年の経験による心理的変化の有働を最低限に抑え、自己尊重感の悪化を抑えながらもバイリンガル、バイカルチュラルが成り立つためには、言語的要因、文化的要因に両立して学習する環境が整う必要があると述べている。しかし、外国人両親の母国への訪問や、その国に接する事が少ないため、二重文化受容態度や文化適応ストレス、適応能力の差を図ることは難しいということも述べられている（Doyle＆Kao2007）。

そこで、本研究では、青少年より学習者として言語的要因、文化的要因に接する機会が多く、二重文化受容態度や文化適応ストレス、適応能力の差を測定しやすい、日韓に在留中の日本語学習者である韓国人大学生を対象者とすることにした。そして、二重言語要因、二重文化要因に接する際の困難には何があるか、その要因を受容する際に大学生の学習に対する心理的変化の差 、韓国在留と日本在留による影響の違いについて明らかにする。このことを通して、二重言語、二重文化は自己尊重観にどのような影響を与え得るかを考察する。

３．研究課題

2章までで述べた内容を基に、本研究では以下のように研究課題を設定した。

RQ1：二重言語、二重文化に接する際の困難、適応度の違いはあるか。実際に他国

（日本）に接している韓国人大学生は、言語や文化に接する際、どのような問題が生じているか。

RQ2：二重言語、二重文化をバランスよく身に付ける際、その国に在留、訪問する場合と在留・訪問しない場合で、差が見られるか。

RQ3：二重言語と二重文化は自己尊重感にどのような影響を与えるか。

４．調査

４．１　調査方法

本研究では、日本語学習者であり、バイリンガル、バイカルチュラルの範囲に含まれると考えられる、韓国、日本在留中の日本語・日本文化学習者にアンケートを行った。具体的には、日本に在留中の韓国人日本語学習者23名、韓国に在留中の韓国人日本語学習者（韓国外大日本語学科）22名である。調査項目は、イジンギョン・イヘジョン（2019p.93-94）を基に作成した表3の通りである。

表３　アンケート調査項目

番号	調査項目	自由記述
①	日本語に接する事になった理由は何か。	無
②	日本語力を向上させるうえで1番難しかった点は何か。	無
③	日本語を使いこなせているか。	無
④	日本で自分が日本語を使用している時、日本人にしっかり伝わっているかについて不安感を持ったことがあるか。	有
⑤	日本の言語と文化を学ぶ際、自信をもっているか。	有
⑥	外国語、文化を学ぶ際、外国在留は必然的か。	有
⑦	韓国の言語、文化、民族性に誇りを持っているか。	有

４．２　調査結果

以下、調査結果を示す。調査項目①と②は選択式、調査項目③から⑦は5段階評定での解答であり、数字が小さいほど否定的意見、大きいほど肯定的意見である。

４．２．１　結果①：日本語に接した理由

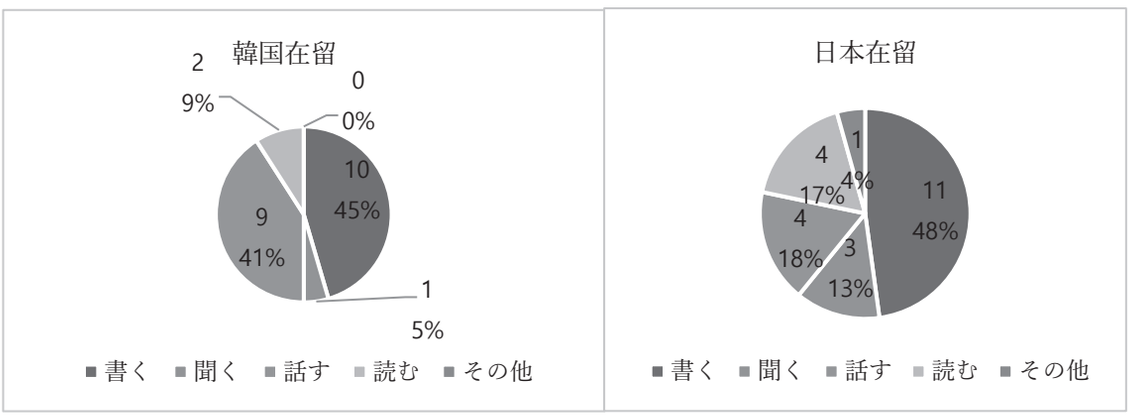
項目①の日本語に接する事になった理由では、韓国在留中の学生の場合、学業が14名、興味が8名であった。日本在留中の学生の場合、留学12名、移住6名、興味3名、就職1名、ハーフ1名という結果であった。特に日本在留中の学生について、韓国在留中の学生の「学業」と同様の「留学」だけでなく、「移住」や「就職」によって日本

語に接し始めたという回答も見られたことが特徴である。

４．２．２　結果②：日本語力を向上させるうえで1番難しかった点は何か

項目②「日本語力を向上させるうえで1番難しかった点は何か」についての結果をグラフ1に示す。

グラフ１　日本語力を向上させるうえで1番難しかった点は何か

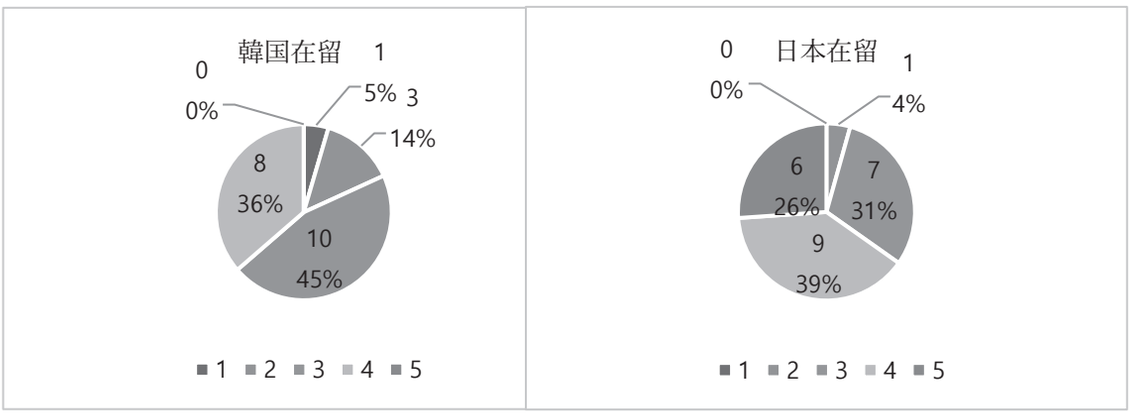


韓国在留中と日本在留中の学生を比較すると、「書く」については差が見られなかったが、「話す」については韓国在留の方が2倍ほど多い結果となった。また、「読む」は2倍、「聞く」は3倍ほど日本在留の方が多い結果となった。これは、日本に在留しながら実際に日本語を日常生活で使用しているかいないかによる違いであると考えられる。「話す」については、韓国では、日常生活で使う機会が少ないため、「話す」練習ができず難しさを感じていると考えられる。一方、「読む」と「聞く」は、日本に在留する方が、教科書などでは習えない単語などに日常生活で接するため、難しさを感じた学生が多いのではないかと考えられる。

４．２．３　結果③：日本語を使いこなせているか

つぎに、項目③「日本語を使いこなせているか」の結果を示す。グラフ2から分かるように、調査結果を見ると、日本在留の場合、使いこなせていると答えた学生が26%（6名）であった。一方、韓国在留の場合、使いこなせていないと答えた人が5%（1名）であった。

グラフ２　日本語を使いこなせているか

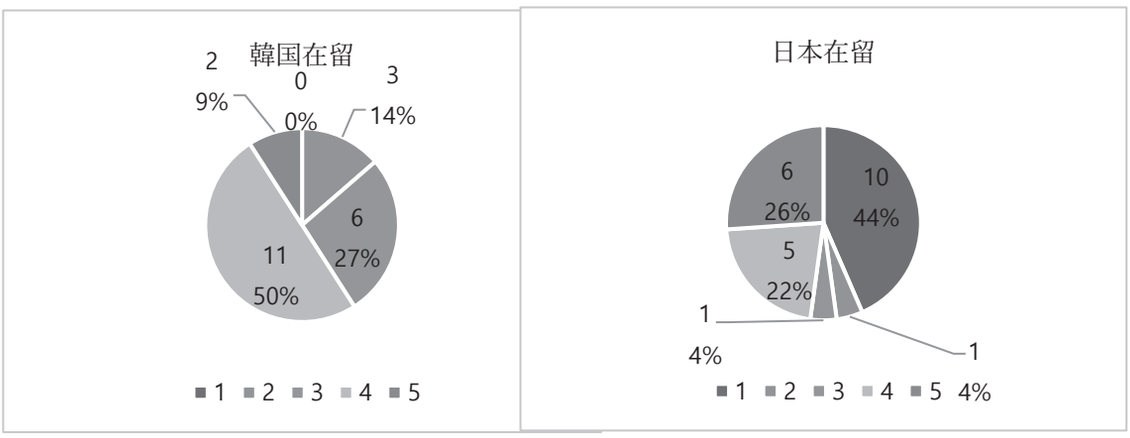


日本在留の学生の場合、日本に住んでいるため日本語を日常生活で使うことが多く、本人の日本語力がどれくらいのレベルであるかを日常生活で試してみることができ、すぐに自覚できる。そのため、実力が向上したと実感しやすいため、使いこなせていると感じていると学生が6名見られたのではないかと考えられる。一方、韓国在留の学生の場合、日本語力の比較や試す相手が同じ専攻の学習者、少数の日本語母語話者のみであるため、日本語力がどれほどであるかを自覚することが難しく、日本語力が基本会話以上にできると答えた学生が36%（8名）、「わからない」「普通」と考えている学生が45%（10名）という結果になったのではないかと考えられる。

４．２．４　結果④：日本で自分が日本語を使用している際、不安感を持ったことがあるか

つづいて、項目④「日本で自分が日本語を使用している時、日本人にしっかり伝わっているかについて不安感を持ったことがあるか」についての結果を示す。グラフ3で示したように、日本で全く不安を感じていない学生が44%（10名）という結果となった。一方、韓国では不安をある程度感じている学生が50%（11名）となった。

グラフ３　日本で日本語を使用している際、不安感を持ったことがあるか

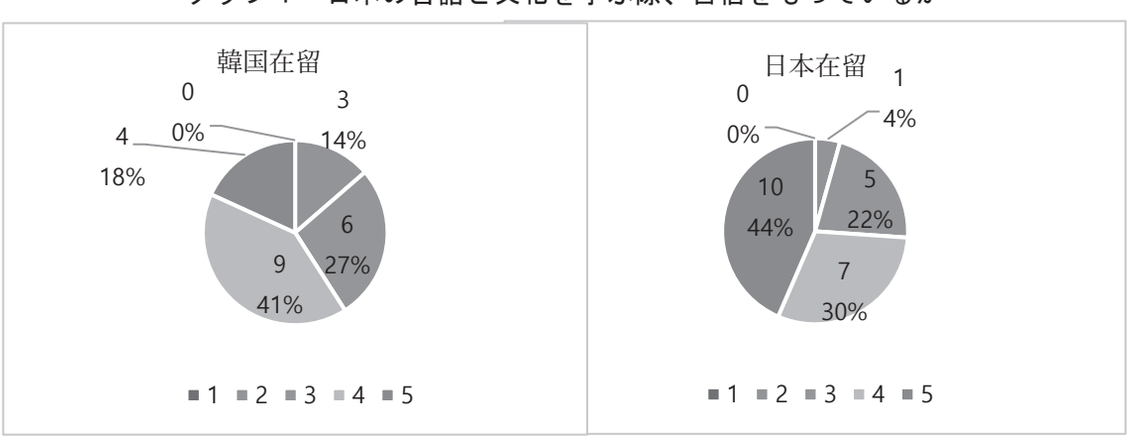


この理由について、自由記述の回答から考えてみると、日本在留中の学生の場合、多数が発音や、言葉使い、簡単な語彙の間違いに不安を感じていという記述が多数あった。一方、韓国在留の学生の場合、韓国語と同じ熟語であっても、全く違う意味で伝わってしまうかもしれないという記述が見られた。 言語によって似ている単語や使い方でも全く違う意味で使われていることがあるため、自国の言葉を直訳して使ってしまう場合、相手に真逆の意味が伝わってしまうか恐れがある。語彙や発音の問題ではなく、コミュニケーションの一番の問題である伝わる意味の違いに関する不安感を感じていると回答していた。

４．２．５　結果⑤：日本の言語と文化を学ぶ際、自信をもっているか

次に、項目⑤「日本の言語と文化を学ぶ際、自信をもっているか」の結果を示す。

グラフ４　日本の言語と文化を学ぶ際、自信をもっているか



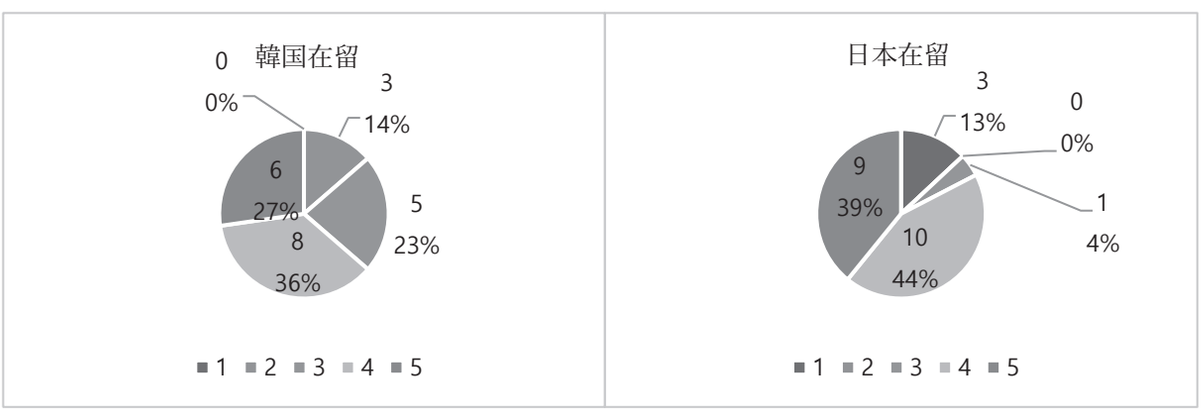
グラフ4から分かるように、韓国在留の学生59％（13名）が自信をもっていると回答しており、14％（3名）が自信がないと回答している。自由記述の回答を見てみると、「自信がある」と回答した学生は無回答であったが、「普通である」「分からない」「自信がない」と回答した学生は自由記述も記入していた。韓国在留の学生の自由回答では、勉強不足で実力発揮ができないことに関する不安感や、自身の能力に関しての不安感からの自信がないと回答した。この結果から、不安感と自信は、「わからない」「普通である」と回答した学生も、自信がない側に位置すると考えられる。

一方、日本在留の学生の場合、自信を持っている学生は44％（10名）で、韓国在留中の学生より高い結果となった。一方、「わからない」「普通」と回答した学生が韓国在留と同等であることから、不安感から自信の無さを感じていると見られる。日本国内で自信を持っている学生が多い理由は、日常生活の中で日本語を使用する環境や状況が多いため、日本語力、日本文化適応度が高くなったからであると考えられる。

４．２．６　結果⑥：外国語、文化を学ぶ際、外国滞在は必要か

次に、項目⑥「外国語、文化を学ぶ際、外国滞在は必要か」の結果を示す。

グラフ５　外国語、文化を学ぶ際、外国滞在は必要か

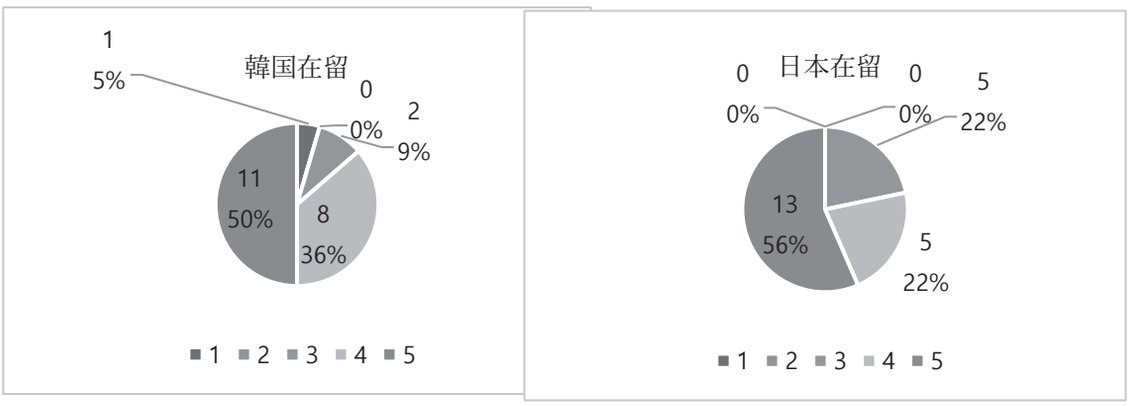


韓国在留中の場合、63％（14名）の学生は留学が必要であるという意見であった。日本在留の場合、合計83％（19名）が「4」「5」を選び、留学することについて肯定的な意見を示した。これは、日本留学を実際に経験しており、その経験が役に立っていることを実感しているからであると考えられる。一方で、日本在留の学生でも13％（3名）は「留学は必須ではない」と回答した。このことから、個々の学習程度の違いや日本語力上昇度の差から、日本滞在の効果の実感も個人差があることが分かる。

４．２．７　結果⑦：韓国の言語、文化、民族性に誇りを持っているか

最後に、項目⑦「韓国の言語、文化、民族性に誇りを持っているか」の結果を示す。

グラフ６　韓国の言語、文化、民族性に誇りを持っているか



その結果、韓国滞在、日本滞在ともに韓国の文化について誇りを持っている（「4」「5」）という回答が、それぞれ86％（19名）、78％（18名）であった。このことから、日本語を学習する韓国人学生は、韓国滞在、日本滞在にかかわらず、自国に誇りを持っていることが明らかとなった。どのような点に誇りを持っているかについて、自由記述を見てみると、「韓国の衣食住の文化」「韓流」「ハングル」「韓国人の国民性」「団結性」という結果が出た。最近では、K-POPの影響で韓国という国名および韓国の文化が世界中に広まっているということもあり、韓国人であるということに誇りを持つ人も多くなっているのではないかと考えられる。

５．結果のまとめと考察

本研究での研究課題に対する結果をまとめる。まず、「RQ1：二重言語、二重文化に接する際の困難、適応度の違いはあるか。そして、実際に他国に接している学生は言語、文化に接する際、どのような問題が生じているか」については、4.2.2（グラフ１）の結果から、両国共に「書く」能力での困難を感じていることが明らかとなった。研究対象者である韓国在留中の学生は、「話す」能力を鍛える上での困難を感じており、4.2.5（グラフ4）の結果から、二重言語および二重文化に接する際、どの国で学習したのかという違いや、価値観や文化の違いなどから、自身の意志とは真逆の意味で相手に伝わってしまうのではないかという点からの不安、語彙を間違ってしまうのではないかと不安などを感じていたことも明らかとなった。日本（日本語）と韓国

（韓国語）のように、文化同士が比較的近接である、あるいは言語の構成が似ている国家であっても、直訳でコミュニケーションを行った場合、話者の本来の意図とは異なる意味で聞き手に伝わることがある。また、言語をどの国で学ぶかによって、自身の言語のレベルを自覚できる程度や、自信、不安感の程度も異なる。これらの結果から、言語をどのように学習するか、どの国で学習するかの違いによって、二重言語、二重文化の適応度に違いが生じ得ることが示された。

次に、「RQ2：二重言語、二重文化をバランスよく身に付ける際、その国に在留、訪問する場合、在留、訪問しない場合の差がみられるか」については、4.2.6（グラフ5）で示したように、日本在留中の学生は留学を経験で学習した事から、自身の言語能力、文化適応度が上昇したとみなしているため、肯定的に回答した。しかし、韓国在留中の学生は、14％（3名）が否定的な解答であった。留学を経験した日本在留中の学生でも、13％（3名）が必然的ではないと回答しているが、個人によって言語力上昇と文化適応度は異なるため、日本在留の一部は批判的回答をしている。留学に肯定的な意見を回答した学生の全体の約40％が「百聞は一見に如かず」と回答している。この回答から、留学などで直接経験することが言語力上昇と文化適応度を上昇させることにおいて重要であると考える学生が多いことが明らかとなった。しかし、あくまでもその学生が二重言語、二重文化に接していることが必要であり、両親の影響などで多文化家族内にいるとしても、接したことのない国での言語学習、文化学習は学生の自己尊重感の低下により限界がある。そのため、他国、多文化家族で両親の片方の国に行くとしても、最低限の言語力、文化知識は必要であると考えられる。

最後に、「RQ3：二重言語と二重文化は、自己尊重感に影響を与えるか」については、自己尊重感はさまざまなものの影響を受けるということが示された。自己尊重感は、2.2の先行研究で述べたように、自己概念、自己受容、自己革新、自己強化などと同等の意味で使用されており、狭義では、肯定的な自己概念で表現され、性格発達の基礎とされている。多文化家族の子供、長年の海外生活でバイリンガル、バイカルチュラルとして生きてきた学生、外国人として韓国に在留中の外国人など、接している言語や文化が2つ以上であるすべての人々は、二重言語、二重文化の影響を受けている多文化家族が移住した国で長年在留することになると、その子供は、在留中の国の言語に親しく接する事が普通である。しかし、その子供が母国に帰国しても、母国の言語や文化に近接に接していない限り、バイリンガル、バイカルチュラルとなることはできない。また、接していない言語、文化に接する事で子供、学生の自己尊重感の低下に影響を与えてしまう。先行研究の結果（表2）から見ても、最低限接している言語、文化の使用度、適応度の違いによって、多文化家族、外国人家庭の学生の自己尊重感が影響を受けることが明らかとなっている。

一方で、多文化家族、外国人家庭の学生、海外在留中の学生が、自国に対してどれほどの誇りを持っているかによっても、自己尊重感は変化する。本研究で調査した韓国人日本語学習者は、韓国に対する誇りを持っている比率が、韓国在留86%（19名）、日本在留78%（18名）という結果となり、主に言語、文化、価値観に関して誇りを持っていることが明らかとなった。言語では、韓国の文字である「ハングル」の美しさ、科学的な構成、誰もが学習しやすいという点を肯定的に認識していた。文化の場合、韓流の影響でK-POPや韓国ドラマなどの文化について、韓国の衣食住の文化に関しても人気が高く、世界中で韓国に接しようする人が増加している。そのため、韓国に在留していない場合でも韓国の文化について接しやすいと考えており、その知名度に関して誇りを持っている。また、韓国人特有の団結心や根性などについても、韓国人としての誇りを持っていると回答している。これら自国である韓国の文化や言語に対する誇りをもつことによって、個人の自己尊重感の上昇、改善する機会となっているのではないかと考える。

以上のことから、本研究では、二重言語、二重文化を身に着け自己尊重感を保つためには、（1）自国に対する誇りを持つこと、（2）二重言語での言語力、二重文化の適応度を上げる環境を整えバランスよく接すること、以上2点が重要であると考える。

６．結論と今後の課題

本研究を通して明らかになった事は、バイリンガル、バイカルチュラルになるためには、言語力、文化適応度を上げる事、その環境を整えて前に進んでいく事も重要であるが、学生の自己尊重感が直接的に影響を与えるものである。また、バイリンガル、バイカルチュラルである学生自身がその言語、文化に興味を持ち、誇りを感じることで自己尊重感を上げることが重要であることが明らかになった。しかし、本研究では韓国人日本語学習者で日本語力、文化適応度が比較的に高い学生を対象としたため、研究対象として設定した大学生が比較的に少ない状況であり、対象者の設定の基準を決定することが難しかったため、今後の研究では、事前調査で完全なバイリンガル、バイカルチュラルと、学問として外国語を学習している学生を比較する方法を得る必要がある。また、韓国と日本は地理的にも文化的にも近接な国家であるため、今後は完全に他文化である状況の国家の人を対象者として設定する必要がある。

参考文献

イジンギョン・イヘジョン(2019)「二重言語要因、二重文化要因が多文化青少年の自己尊重感に与える影響」『社会科学研究第』30(4)、83-86、89-92

キムサンオク・ジョンヨンジャ(2013)「大学生の自己分化、自己尊重感と精神健康との関係」『韓国人類生態学会誌』22(4), 539-558

箕浦康子(2010)「バイリンガルのアイデンティティを研究するために」『母語継承語バイリンガル教育（MHB）研究』6, 1-22

Berry, J. W.(1997). *Immigration acculturation and adaption*. Applied Psychology. IAAP 3 (1), 5-34

Doyle, J. M&Kao G. (2007). *Are racial identities of multiracials stable? Changing self identification among single and multiple race individuals*. Social psychology quarterly. Sage jurnals 70(4), 405-423

Suman K. Bery. (1990). *Economic Policy Reform in Developing Countries, The Role and Management of Political Factors*. World Development. Elsevier 18(8), 1123-1131